イアン・フレミング
イ☆ン・フ☆ミ☆グ
アリステア・マクリーン

世界ミステリ全集 13

世界ミステリ全集

13

サンダーボール作戦
アリゲーター
ナヴァロンの要塞

イァン・フレミング
イ＊ン・フ＊ミ＊グ
アリステア・マクリーン

早川書房

世界ミステリ全集　13

イァン・フレミング
「サンダーボール作戦」井上一夫訳
イ＊ン・フ＊ミ＊グ
「アリゲーター」井上一夫訳
アリステア・マクリーン
「ナヴァロンの要塞」平井イサク訳

〈検印廃止〉

1972年10月20日初版印刷　1972年10月31日初版発行
発行者　早川　清　東京都千代田区神田多町2〜2
発行所　株式会社早川書房　東京都千代田区神田多町2〜2
電話　東京（254）1551〜8　振替　東京47799
印刷所・株式会社亨有堂印刷所　製本所・株式会社明光社
本文用紙・本州製紙株式会社
表紙クロス・本州リンソン／英国ワトソン社製
函紙・駿河製紙株式会社
製函所・株式会社佐藤製函所　定価1300円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えします〉　0397-807130-6942

目次

サンダーボール作戦……3
アリゲーター……235
ナヴァロンの要塞……323
イァン・フレミング／イ＊ン・フ＊ミ＊グ／アリステア・マクリーンについて〈座談会〉……611
イァン・フレミング著作リスト……633
アリステア・マクリーン著作リスト……635

函・扉・表紙／勝呂　忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

サンダーボール作戦

イアン・フレミング
井上一夫訳

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1972 Hayakawa Shobo

THUNDERBALL

by

IAN FLEMING

Copyright © 1961 by
IAN FLEMING

Translated by

KAZUO INOUE

Published 1972 in Japan by
HAYAKAWA SHOBO & CO., LTD.
This book is published in Japan by arrangement
with PETER JANSON-SMITH LTD., through
CHARLES E. TUTTLE CO., INC., TOKYO.

アーネスト・キュネオに

サンダーボール作戦

登場人物

ジェイムズ・ボンド……英国秘密情報部員
M……ボンドの上司
リッピ伯爵……謎のポルトガル人
エルンスト・スタヴロ・ブロフェルド……国際秘密組織スペクトルの設立者
コッツェ……東ドイツの物理学者
エミリオ・ラルゴ……スペクトル一味
ドミネッタ（ドミノ）・ヴィタリ……ラルゴの情婦
ジュセッペ・ペタッチ……ＮＡＴＯ派遣のイタリア空軍将校
フェリックス・レイター（Ｆ・ラーキン）……アメリカ中央情報局員

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　「無理せんようにな、ボンド君」

いわゆるいすかの嘴のくいちがい、ジェイムズ・ボンドにとって、することなすこと裏目裏目と出るような日の一日――

まず何よりも、ボンドは自分自身が恥ずかしかった――これは、彼としては珍らしい心理状態だった。二日酔いの、それもひどいやつで、頭は痛いし節々がこわばっている。咳をすると――たばこの吸いすぎが飲みすぎに重なって二日酔いを二重にしているのだが――池の水のアミーバーみたいに、小さな黒く光る斑点がわやわやと視野のなかにわき上ってくる。たしかに、あの一杯が飲みすぎだという徴候をはっきり見せていた。パーク・レーンの豪奢なアパートで、最後に飲んだあのウイスキー・ソーダは、それまでに飲んだほかの十杯とものは同じだったのだが、喉をとおるのにひまがかかったし、苦いあと味がして、飲みすぎのいやな感じが残った。しかも、飲みすぎだぞ、というこの徴候を自分で承知しながら、もう一勝負だけつきあうといってしまったのだった。最後の勝負だ、百点で五ポンドでは？　ボンドはそれに同意したのだった。しかも、そのゲームを、まるでばかみたいなやり方でやってしまった。いまでもボンドの目には、彼のジャックを得々と負かしたスペードのクイーンの、肥った顔に浮んでいるモナ・リザみたいなまぬけな微笑が見えるようだ。ボンドのパートナーが噛みつくようにいっていたが、敵はたしかにそのクイーンをマークしていたし、そいつによって、酔ったボンドにグランド・スラムの点をさらに倍にさせ、おかげでボンドたちは、敵に四百点を献上してしまうことになったのだった。二十点ゲームだったので、結局ボンドの負けは百ポンド――大切な金を失った。

ボンドは顎の切ってしまったところを、もう一度血のついた止血棒でおさえると、洗面台の上の鏡からふくれっ面をして見かえしている自分の顔を、ばかにしたようにながめた。阿呆、まぬけなトンチキ！　こんなことになるのも、すべて何もすることがないからなのだ。これでひと月以上も、書類仕事ばかりだった。愚にもつかない書類に目をとおして、自分の番号をサインする。一週間ごとに、ますま

す頑固になって、そういう書類にこまごましたメモを書きこんだり、毒にも薬にもならないほかの各部の連中から、文句をつけてくるような電話に噛みつきかえしたりしているのだった。しかも秘書が流感で休暇をとり、かわりに総務からまわしてよこしたのが、まぬけで——しかも、もっと悪いことには、醜女(ブスケ)ときているのだ。そいつはばかていねいにボンドのことを「サー」と呼び、口をきかせればみそっ歯だらけの歯をみせてしかつめらしくしゃべる。そしてまた、今日は月曜日。また一週間がはじまる。窓には梅雨(つゆ)の雨が流れていた。ボンドはフェンシックスを二錠飲んで、イノスに手をのばした。寝室で電話のベル。本部直通電話の、大きなベルの音だった。

ロンドンの町なかを車でかけぬけ、九階まで昇るエレベーターをいらいらしながら待ったとはいえ、ジェイムズ・ボンドは必要以上に胸をときめかせて、椅子を引き出して腰をおろすと、机の向うの、おなじみの穏やかでグレイの、やけにすんだ目を見つめた。この目から、何が読みとれるだろう?

「おはようジェイムズ。今朝はちょっとはやく引っぱりだして、気の毒だったな。今日はすごく忙しいんだ。あまり忙しくなる前に、話しておきたいことがあってな」

ボンドの気負いたった気持ちが、少しずつうすれていった。Mが番号で呼ばずにこうやって名前で呼ぶときは、いい話だったためしがない。どうも仕事の話ではなさそうだし——どうやら個人的な何からしい。大きな仕事の話の前ぶれのような、気負いこんだ緊張はMの声にはまったくなかった。Mの顔つきは、熱心で好意的で、慈愛に充ちているといってもいいくらいだった。ボンドも当りさわりのない挨拶のようなことをいう。

「ここんとこ、ちょっと顔を見なかったな、ジェイムズ。調子はどうだ? つまり、体の具合はどうかということだ」Mは机の上から書類を一枚とりあげた。何かを書きこむような様式になっている書類で、それをさあ読むぞというように構える。

うさん臭そうに、この書類は何が書いてあるんだろう、いったい呼び出されたのは何ごとだろうと勘ぐりながら、ボンドはいった。「いたって元気です」

Mはおだやかにいった。「ところがジェイムズ、医者はそうは考えとらんのだな。これはこの間の健康診断の書類だ。医者が何といっとるか、きみにも聞かせといたほうがいいと思ってな」

ボンドはむっとして、その書類の裏側をにらんだ。ちえッ、何てことだ！　やっと怒りを押えていう。「何でもうかがいます」

Mはボンドを、丹念に値踏みするような目つきでながめると、書類を目のそばによせて読みあげる。「『この部員は本質的にはどこといって悪いところはないのだが、ただ、不幸なことに、こういう生活態度をつづければ、この幸福な状態を保つことはできないかもしれない。従来も再三注意したにもかかわらず、たばこを日に六十本も喫うことをみとめている。しかも、普通のいろいろな種類の安たばこでなく、ニコチン含有量の多いバルカン葉のはいったたばこである。劇務に従事していないときは、この部員は毎日、六十度から七十度の酒精分をふくむ酒類を半ビン程度摂取している。検査の結果、それも明らかに悪化してゆく徴候が、わずかながらも現われている。舌には舌苔があり、血圧も最高一六〇最低九〇とちょっと高い。肝臓の状態はあまりはっきりはしていない。しかし、さらに強くたずねたところ、しばしば後頭部に頭痛をおぼえ、背部僧帽筋の痙攣があり、いわゆるリューマチ性繊維組織炎の小瘤が触知されることが認められた。この症状は当人の生活態度に起因するものと思われる。彼の職業につきものの緊張をほぐすためには、酒の飲みすぎは役には立たないし、そういうことをしていては、結局中毒になって、秘密情報部員としての適格性を傷つけることになるという当方の忠告を受けいれようともしない。ここに007号に推薦すべき処置は、二、三週間のもっと節制した生活でのんびりすることであり、それさえすれば、ふたたびもとのすばらしい健康状態をとりもどすであろうことは疑いない』」

Mは手を伸ばして、その診断書を既決の箱のなかにするっといれた。両手を机の上、目の前に平らについて、じっとボンドを見つめる。「ジェイムズ、あまり申し分ないともいえんだろ？」

ボンドは癇癪を声に出さないように苦労していった。「わたしは完全に健康です。だれだって、たまには頭が痛くなることはあります。週末にゴルフをやる人間は、たいていリューマチの気はもってるもんです。汗をかいた上に、吹きっさらしのところに坐ってたりするからですよ。アスピリンを飲んで、塗布剤でもぬっとけばなおっちまうんです。本当に、そんなひどいもんじゃありません」

Mはきびしくいった。「ジェイムズ、それがきみの大まちがいなんだ。薬を飲むのは、ただその場の徴候を押えるにすぎん。薬ではそういう病根まではなおせんのだ。うわ

べを塗ってごま化すだけだ。結果はますます毒にむしばまれた状態になって、とどのつまりは命とりになるかもしれん。薬なんてものは、みんな体の組織には有害なものなんだ。自然に反するものだからな。われわれが食べとる大部分の食物についても、これはいえることだぞ。ふすまをすっかりとっちまった白パンとか、せっかくのいいところを工場ですっかり除いてしまった精製糖、それにビタミンのほとんどを煮沸でこわしてしまった殺菌牛乳——みんな手を加えすぎて、本質を変えてしまったものばかりだ。そういえば——」Mはポケットに手をつっこんで手帳を出すと、手帳を見ながらいった。「われわれが食べとるパンに、わずかばかりの砕きすぎの小麦粉のほかに、何が含まれとるか知ってるか？」Mは責めるようにボンドを見た。「大変な量の石灰とさらし粉、塩素ガスにアンモニア塩、それにみょうばんだ」Mは手帳をポケットにもどした。「どう思う？」

ボンドはこういう話にすっかりきつねにつままれたみたいで、おずおずといった。「わたしは、それほどそんなパンばかり食べてるわけじゃありません」

「そうかもしれん」Mはじれったそうにいった。「だが、きみは石臼でひいた本当の全麦パンをどのくらい食べてる？　ヨーグルトはどのくらい食べとるかな？　生野菜や木の実や新鮮な果物を食べとるかね？」

ボンドは笑顔を見せた。「本当に、そういうものはちっとも食べてませんね」

「笑いごとではないんだぞ」Mは人差指で、話に力をこめるように机をたたいた。「よく聞きたまえ。自然にさからって、健康になる道はない。きみの体の故障は——」ボンドが抗議しようと口を開いたが、Mは手を上げて押えた。「医師が発見した、きみの根深い毒血症は、そもそもから自然に反した暮し方をしてきた結果なんだ。たとえば、バーチャー・ブレンナーという名を聞いたことはあるかね？それとも、クナイプとか、プライスニッツ、リクリー、シュロート、ゴッスマン、ビルツのだれかを知っとるかね？」

「いえ、知りません」

「そうだろう。とにかく、きみも考えなおして、こういう連中のことを勉強するんだな。これはみんな自然療法の大家たちだ。われわれは迂濶にも、こういう連中の教えを無視してきてしまったのだ」Mは熱っぽく目を輝かせた。「さいわいイギリスには、こういう人たちの後継者が大勢仕事をつづけている。自然療法というやつが、手がとどく

ところにあるんだ」
　ジェイムズ・ボンドは、けげんそうにMの顔を見た。親爺さんはいったいどうしたんだろう？　こいつは、もうろくの最初の徴候なのだろうか？　しかしMは、ボンドもこれまでに見たこともないくらい、かくしゃくとしていた。冷やかなグレイの目は水晶のように澄んでいるし、皮膚にも張りがあって、しわだらけの顔が健康に輝いている。鉄グレイ色の髪まで、新らしく生きかえっているように見える。では、この気違いじみた話は、いったいどういうことなんだ？
　Mは未決の箱に手をかけると、すぐにボンドをさがらせる前ぶれのように、それを目の前に引きよせた。陽気に言葉をつづける。「まあ、話はそれだけだよ、ジェイムズ。マネーペニー君に、予約を申しこませといた。二週間で充分健康になれるだろう。帰ってくるときは、これが本当に自分だろうかと思うくらい、別人のようになるぞ」
　ボンドはあっけにとられてMをながめた。しめ殺されそうな声でいう。「帰ってくるって、どこからです？」
「シュラブランズというとこだ。この世界ではかなり有名な男――ウェイン、ジョシュア・ウェインという男がやっとるとこだ。すばらしい男でな。年は六十五になるんだが、四十以上には見えん。その男が、きみのことはよく面倒見てくれるだろう。最新式の設備がととのってて、専用の薬草園までもっとるんだよ。広々とした田舎のいいとこだ。サセックスのウォシントンの近くだ。それに、こっちの仕事のことは心配はいらんよ。二週間ばかり、仕事のことはすっかり忘れてくるんだな。きみの課の仕事は、009号にやるようにいっておく」
　ボンドには自分の耳が信じられなかった。「しかし、そのう、わたしは完全に健康なんです。本当にそんなことを？　つまり、本当にどうしてもいかなきゃいけないんですか？」
「いや」Mは冷やかな笑顔。「どうしてもというわけではないな。だが、大事なことだな。きみが00課（ダブルオー）にとどまっていたいなら、必要だ。わたしとしても、百パーセントの完全な適格者でなければ、その課においとくことはできん」Mは目の前の籠に目を落すと、暗号電報のとじこみを手にとった。「話はそれだけだ、007号」それっきり顔も上げないし、きっぱりした口調だった。
　ボンドは立ち上った。何もいわなかった。部屋をつっきって外に出ると、ばか丁寧な静かなしめ方でドアをしめる。
　ドアの外では、ミス・マネーペニーがやさしく彼を見上

げていた。

ボンドは彼女の机のところへゆき、タイプライターがとび上るくらい、はげしく拳で机をたたいた。カンカンになっていう。「ペニー、こりゃいったいどういうわけなんだ？　親爺さん、気がふれちまったのかい？　何だってばかげたあんなたわ言をいうんだろう？　そんなとこへいくもんか！　親爺さんは完全に狂っちまったんだぜ」

ミス・マネーペニーは楽しそうに笑った。「むこうの支配人は、とても親切でよくやってくれたわ。あなたには別館の〝ぎんばい花の間〟をとってくれるそうよ。とてもいい部屋なんですって。薬草園を正面から見わたせる部屋よ。そうそう、あそこには専用の薬草園まであるんですってね」

「聞いてるよ、そのくだらん薬草園のことなんかも。ところで、ねえペニー」ボンドはした手に出ていった。「いい子だから教えてくれ。これはいったいどういうことなんだい？　親爺さんは、どういうつもりなんだい？」

このボンドのことを、しばしば望みなき夢というふうに見てきたミス・マネーペニーは、ボンドがかわいそうになってきた。内緒話のように声をひそめていう。「実はねえ、これも例のすぐに消えちまう波みたいなもののひとつだと思うのよ。ただ、その前につかまっちまったあなたが、運が悪かったんだわ。Mがいつも仕事の能率について、とんでもないことを考えてばかりいることは知ってるでしょ。ほら、前にも全員が体操の講習をひととおり受けさせられたことがあったじゃないの。それから、あの頭をしぼるやつ——精神分析医をつれてきたこともあったわ——あれはあなたは助かったのね。どこか、国外に出張していたときだったわね。あのときも、各部課の責任者は、その男に自分たちの見た夢を話さなきゃならなかったのよ。もっとも、精神分析医のほうで、長つづきしなくなってしまったわ。あんまりすごい夢ばかり聞かせる人がいるんで、怖くなるか何かしちまったのね。ところが、先月になってMは腰痛というのが出てきて、ブレイズ・クラブの友だちに、田舎のその療養所の話を聞いたのよ」ミス・マネーペニーは、可愛いロをひん曲げた。「どうせ向うも、でぶの飲んだくれの人だったんでしょ。その人がたしかにそこがいいと太鼓判を押して、人間てものはみんな自動車みたいなもので、ときには車庫入りしてすみずみまで掃除をしなければならないとMにいったのね。その男は、毎年そこへいってるし、経費は一週間で、ブレイズ・クラブで一日で軽く使っちまう二十ギニーで上るし、しかも気分は素晴しくよくなると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com